

美術専攻 日本画研究領域

チ ョ ウ ツ ウ セ ン

張 梓璇



往還

紙本着彩

往還

本研究は、日本画制作において「人間の病的な精神面」の表現を通して、人々に癒しを与える表現を探究する試みである。伝統的な日本画は、線と素材による繊細な美や、あえて影を表現せずに空間を表現するなど、西洋絵画とは異なる審美領域を形成した。戦後、西洋の現代美術の流入により、日本画は古典的な要素を保持しつつも、新しい価値観を取り入れた「和洋折衷」の道を切りひらいたとされている。従来、日本画における感情表現は「もののあわれ」に象徴される曖昧な情緒が中心であったが、近年では人間の内面に潜むネガティブな感情や精神的体験にも注目が向けられつつある。しかし、個人的な精神の病理そのものを主題とする表現は、依然として発展途上にあるのではないだろうか。私は現代人の内なる本能と外的環境の衝突によって生じる病的な精神状態を捉え、人間の強烈な葛藤や微細な感情の変化を表現することをテーマとした。ここで扱う人間の精神は、単純な獣性や生理的な衝動のほか、言語化できないまま心の奥に沈殿する感情の層や、社会的自己では抱えきれない揺らぎなどから形成されている。画中の動物は、人間の本能を映す鏡であると同時に、私自身の心の分身でもある。また、夢の中に現れる象徴的な風景や、精神が錬金術的に変容し全き人間像へと迫る過程を精神のメタファーとして画面に取り込んでいる。本制作では、感情の揺らぎや無意識の欲望のメタファーとして女性像と蝶々を対置させ、人間存在に内在する理性と本能、生と死の境界を描き出そうとした。女性像と蝶々が交錯する姿は、安定と混乱といった相反する感情の境界を往還する存在として立ち現れる。

意識と無意識が交錯する曖昧な感覚は岩絵具の滲みや濃淡の変化によって可視化される。人間の隠された暗い面を表現することで、抑圧された感情を見つめ、私たち自身の理解を深めたいと考え、そして癒しや解放の感覚へと至る契機を提示したい。